

## 主 題：謙遜であれ 2

## 聖書箇所：コリント人への手紙第一 4章14-21節

コリント教会の問題、それは「プライド」でした。パウロはこの問題の恐ろしさだけでなく、パウロたちと同じように彼らが謙虚になることを教え続けています。なぜなら、それは彼らが主の栄光を現す者として歩み続けていくために大切なことだからです。すでに学んだように、このような問題を抱えていたコリント教会の兄弟たちに対して、二つのことを教えました。一つは「書かれていることを越えない」ようにと、また、「一方にくみし、他方に反対して高慢にならないため」と6節に記されています。

1) 書かれていることを越えない：つまり、聖書の教えから逸脱してはならないということです。彼らの問題は、聖書の教えに基づいて物事を判断するのではなく、自分たちの考えに基づいて行っていたことです。たとえば、彼らは賜物や働きに優劣をつけていました。こちらの賜物のほうがすばらしいとか、こっちの人のほうがすばらしいと…。そのことによって、彼らの中に分裂分派が生じていたのです。このような人間の考えに従った場合、人間の思い、人間の基準で物事を判断するようになっていきます。彼らに必要なことは、自分たちの考え、自分たちの思いが聖書の教えに準ずるものかどうかを確認することでした。自分たちがしようとするのが本当に神が教えておられることなのかどうかと…。しかし、彼らはそのことを怠っていたのです。私たちも同じです。自分が正しいと考えること、良いと思うことが本当に神の前に正しいのか？神の前に良いことなのか？それを考える必要があります。

その規準は聖書です。私たちクリスチャンは主に従うことを決心した者です。それゆえに、私たちは主のみこころが記されてある聖書のことばに従うことは当然のことです。私たち罪赦された者は、時代に関係なく地域に関係なく性別や年齢に関係なく、この聖書の権威に従う者たちです。私たちの信仰の土台、それは以前学んだように、宗教改革者たちが声高らかに叫んだこと、その一つは「聖書のみ」でした。宗教改革の大切な原理の一つであり、私たちプロテスタントの根本教理とも言えるものです。

・「聖書のみ」 = (1) 聖書が私たちにとって至高の権威であるということです。私たちは人間に従うではありません。神がくださったみことばに、この権威に従うのです。(2) 私たちが救いを得るために、また、信仰生活を送るために必要なものは聖書だけだということです。聖書だけで十分だということです。聖書によって私たちはどうすれば罪の赦しを得ることが出来るのか、その真理を知ることが出来ます。私たちが信仰者として歩んでいくために必要なことはすべて、この聖書に記されています。これで十分なのです。なぜなら、これが神が私たちに与えてくださったものだからです。聖書の教えから外れてはいけなく、まず、そのことを教えました。

2) 一方にくみし、他方に反対して高慢にならない：パウロが教えることは「高慢は罪だ」ということです。主によって贖われた者たちが集まっているところで、だれが一番偉いのか？とそんな自慢をしていたらどうでしょう？みながプライドに満ちて自慢し合っていたら神が喜ばれるはずはありません。この教会にあったのはまさに「いや、このリーダーがすばらしい、いや、このリーダーのほうがすばらしい」と自分の推すリーダーを高く上げて、そのリーダーにくみしない者を見下げていたのです。高慢がいかに恐ろしい罪かをパウロは教えたのです。

そのことを私たちはこの4章から学んで来てパウロから教えられ続けました。今朝もコリント教会の過ちを矯正しようとするパウロのメッセージを学んでいきますが、4：14にはこのように書かれています。「私がこう書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、愛する私の子どもとして、さとすためです。」ここに「さとす」ということばが出ています。これは「忠告する、～を叱る、たしなめる、警告する、訓戒、教え諭し、戒める」などの意味です。そのことによって人々が「主の前を正しく歩み続けていく」ためです。その道から外れているなら彼らに警告を発して彼らを諭さなければなりません。パウロはこのことを繰り返していたのです。見て来たように、彼らの過ちを常に指摘し、それを矯正しようとしていました。では、なぜ、パウロはそこまで忍耐をもって彼らに働き掛けていたのか？彼らが正しく歩むことを願ったのか？その理由が14節に記されています。

## 1. パウロの諭しの理由 : 彼らへの愛 14-16節

14節に「…愛する私の子どもとして、さとすためです。」とあるように、パウロが彼らを諭し続けた理由は「彼らを愛しているからだ」と言います。彼らの間違いを公にして彼らが恥をかくようなことがないようにと、少なくとも、ここでパウロが願っています。でもこの後、Iコリント6:5や15:34を見ると、パウロは敢えて彼らに恥をかかせようとしています。「6:5…私はあなたがたをはずかしめるために、こう言っているのです。」、「15:34 目をさまして、正しい生活を送り、罪をやめなさい。神についての正しい知識を持っていない人たちがいます。私はあなたがたをはずかしめるために、こう言っているのです。」と。それは彼らがいつまで経っても罪を悔い改めて正しい歩みをしないからです。でも、この時点でパウロが望んだことは、彼らが罪を悔い改めて正しく歩いていくことでした。そこでパウロは「あなたがたをはずかしめるためではなく、愛する私の子どもとして、さとすためです。」と言うのです。

### ・「キリストにある養育係」と「父」

15節には「たとえあなたがたに、キリストにある養育係が一人であろうとも、父は多くあるはずがありません。…」、パウロはこのコリントの兄弟姉妹のことを「自分の愛する子ども」として扱っています。自分のことを「父」と呼びます。ここに「キリストにある養育係」と「父」が対比されています。「養育係」とは「教師」です。個人的に指導する教師であったり、また、子どもの世話をする家庭教師で、多くは奴隷がそれに任命されていました。ですから、人々はそのことをよく知っていました。パウロは「あなたがたを教える教師たちが、「一人」とは「無数」という意味をもっています、一人であろうと二人だろうと関係ない、たくさんいるでしょうとパウロは言います。でも、父親は一人でしょうと対比をするのです。ですから、パウロはあなたがたを教え訓練する教師は多くいるけれど、あなたがたの父は一人だと言うのです。もちろん、物理的には父は一人です。パウロは霊的な意味でキリストが彼らの父であると言っているのです。

### ・パウロは主から「福音を伝える」という特別な務めをいただいた

使徒9:15「しかし、主はこう言われた。「行きなさい。あの人是我の名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わたしの選びの器です。」、主はパウロを用いて「救われる人々」を起こされました。ピレモン10節には「獄中で生んだわが子オネシモのことを、あなたにお願いしたいのです。」と、ピレモンに対してこのように願っています。主は同じように、私たちをも救い福音宣教へと召してくださっています。そして、「弟子を作ること」を命じられています。

なぜ、パウロとコリント教会の兄弟たちは「父」と「子」という関係になったのか？この箇所が私たちにそのことを明白に教えてくれます。15節の後半「この私が福音によって、キリスト・イエスにあって、あなたがたを生んだのです。」と。パウロ自身がキリストの福音を語ることによって彼らが救いに与ったことです。そのときに、パウロと彼らとの新しい関係が確立したのです。ですから、自分のことを彼らにとっての「霊的な父」と言い、そして、彼らのことを「霊的な子ども」として扱っているのです。

### ・「キリスト・イエスにあって」

注目いただきたいのは、15節のことばでパウロは決して救いのみわざを自分の手柄にしていないことです。15節の後半、今見たところですが、「この私が福音によって、…」を直訳すると、「キリスト・イエスにあって、福音の手段として、私はあなたがたの父となったのです。」となります。まず、「キリスト・イエスにあって」とは、この救いの働きがパウロの働きではなく主の働きであることを明らかにしたのです。彼らが救いに与ったのはキリスト・イエスのみわざであると、そのように言うのです。

同時に、「福音によって」とあります。「福音を手段として」ということです。つまり、人が救いに与る唯一の手段は「福音」だからです。パウロは「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」（ローマ1:16）と言いました。福音を信じることによって救いを得る、その力があることを教えるのです。4:15「あなたがたを生んだのです。」と訳されています。これは「父となる」ということです。彼らが救いに与ることによって、パウロは彼らの霊的な父となったのです。ですから、彼らが自分にとって霊的な子どもであるゆえに、パウロは彼らを諭し続けたのです。なぜなら、彼らのことを愛しているからだと言います。まさに、これが真の父と子どもの関係です。もちろん、母親もそうですが、一家の長は父親です。

## 1) 地上の父の例 :

### ・それが主から与えられた務めであるから

私たちがこの地上の父親のことを考えるときに、神がどんなことを父親に望んでおられるのか？そのことは聖書のみことばによって明らかです。子どもを愛している父親は子どもたちの過ちを矯正し、彼らが正しく歩み続けていくように彼らを諭し続けていきます。なぜなら、それが父親に与えられた務めだからです。皆さんご存じのように、エペソ6：4に「父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。」とあります。私たちがよく知っている箇所です。

「教育」と「訓戒」、私たちが子どもたちを育てていくときに、この二つが大切だとパウロが言います。

「教育」 = 正しい行動、正しい態度と、信仰に関して訓練を与えることです。子どもたちが正しい態度をもって行動するように、また、信仰について、彼らがしっかりと神を信じて歩んでいくように訓練を与えること、それが「教育」です。どこの学校に入れるかが私たちにとって大切な神からいただいた務めではありません。私たちが神からいただいた務めは、子どもたちが神を愛する者として、神の前を正しく歩んでいくように教育することです。

「訓戒」 = 正しい規則、みことばに基づいて教える、しつけをするということです。聖書をもって彼らを教えていくのです。聖書をもって彼らをしつけていくのです。それを実践しなさいとみことばは教えています。

ですから、私たちに与えられている責任は明確です。子どもたちが神を愛する者として育っていくように、神の前を正しく歩んでいくように彼らを見こもつばをもってしつけていくのです。旧約聖書でも同じことを教えています。ソロモンは箴言29：15で「むちと叱責とは知恵を与える。わがままにさせた子は、母に恥を見させる。」と。この「叱責」と「むち」ということばは同じ意味です。「叱責」とは「叱る、矯正する、戒める、罰」という意味があります。「むち」は「杖、棒のこと」で、同じように子どもたちを矯正するために用います。ですから、言っていることは、親として子どもたち叱ること、彼らを矯正すること、彼らを戒めることが必要だということ、決して、わがままにさせてはいけないということです。

ですから、こうしてみことばを見て、当然、地上の父親として子どもたちを正しく導いていく務め、責任があります。なぜなら、彼らを愛しているからです。同時に、どうしてこのように子どもたちを諭していくのか？

### ・それは、彼らが神からの祝福をいただくため、彼らが祝された人生を生きるためです

私たちが知っていることは、祝福は神から与えられるものだということです。この世の富をどれ程得たとしても、どんなに名声を自分のものにしたとしても、そこには神の祝福に並ぶものはありません。神だけが私たちに祝福をくださるのです。そのためにはどのようにあるべきか？そのためには、子どもたちが神を愛して神を敬って神に従うことです。伝道者の書8：13には「悪者にはしあわせがない。その生涯を影のように長くすることはできない。彼らは神を敬わないからだ。」とあります。神に背を向けて生きる生き方がどれ程悲惨であるか、そのことを言うのです。神を愛して神に従うときに神の祝福があるのです。エレミヤ17：5-8でエレミヤがこのように言っています。「：5 【主】はこう仰せられる。「人間に信頼し、肉を自分の腕とし、心が【主】から離れる者はのろわれよ。：6 そのような者は荒地のむろの木のように、しあわせが訪れても会うことはなく、荒野の溶岩地帯、住む者のない塩地に住む。」と、神に背を向けて生きる人生に神の祝福はありません。それは全く人生を無駄にすることになります。確かに、私たちは神に従うと言っても失敗だらけですが、神に従うときにそこには神のあわれみがあり、神の祝福が約束されています。「：7 【主】に信頼し、【主】を頼みとする者に祝福があるように。：8 その人は、水のほとりに植わった木のように、流れのほとりに根を伸ばし、暑さが来ても暑さを知らず、葉は茂って、日照りの年にも心配なく、いつまでも実をみのらせる。」と。

ですから、こうして地上の父を見たときに、なぜ、私たちは子どもたちを諭していくのか？彼らを愛するからだ、その務めをいただいただけでなく、子どもたちの幸せを願っているゆえに、彼らがしっかりと神に従っていくように、そのように教えるという大きな務めを神からいただいているのです。今、見て来たのは地上の父親、私たちのことです。

## 2) 天の父の例 :

では、天の父はどうか？実は、天の父も同じように、ご自身が愛する者たちを「懲らしめる」ということがみことばに記されています。ヘブル12:5-8「:5 そして、あなたがたに向かって子どもに対するように語られたこの勧めを忘れていません。「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。:6 主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。:7 訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。:8 もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であって、ほんとうの子ではないのです。」、神も私たちを愛するゆえに、私たちが間違った道を歩もうとするときは懲らしめを与えてくれるのです。なぜなら、正しい道に戻るためにです。

ですから、地上の父であろうと、天の父であろうと、子どもが間違った歩みをしているなら、それを諭すのです。それは彼らを愛しているからだと言います。もちろん、その諭しを感謝して受け入れるかどうかはその子に係っています。

パウロは「私はあなたがたのことを愛している」と、そのようにコリントの教会の人たちに言ったのです。「だから、私はあなたがたが正しく歩んでほしいから、こうして諭し続けている」と言うのです。パウロがこのような働きをしたのはコリント教会に対してだけではなく、他の教会に対しても同じようにしています。たとえば、Iテサロニケ2:11-12には「11 また、ご承知のとおり、私たちは父がその子どもに対してするように、あなたがたひとりひとりに、:12 ご自身の御国と栄光とに召してくださる神にふさわしく歩むように勧めをし、慰めを与え、おごそかに命じました。」とあります。テサロニケの教会のクリスチャンたちが神の前を正しく歩んでいくために、パウロたちは教えを与え続けたのです。同じことをしているのです。主のみこころを教え、みこころから反したなら彼らを諭したのです。

また、エペソの教会の長老たちに対してもパウロはこのように語りました。使徒の働き20:31「ですから、目をさまさない。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。」と。パウロがエペソに滞在した間、まさに、このような働きをしていたのです。ですから、コリント教会だけの問題ではなかったのです。パウロは彼らが救いに与る、そのことに関わったなら、彼らの信仰が成長するようにと願い、彼らが正しく神の前を歩み続け、神の祝福をいただくようにと、道から外れたときには彼らを諭したのです。

こうして見たときに、まさに、これは私たちひとり一人にとっても非常に大切な働きを教えてください。たとえば、教会において兄弟姉妹が罪の中を歩んでいるなら、彼らの歩みが間違っているなら、私たちは彼らを愛するゆえに、そのことをしっかり彼らに話して、彼らとその罪を悔い改めて神の前を正しく歩むようにと諭すことが必要です。もし、私たち兄弟姉妹が愛をもってそのような働きをするなら、神のみわざが為され、神がそのことをお喜びになるのです。そこに憎しみや怒りがあるならそれは愛ではありません。ただ自分の怒りをぶつけたに過ぎません。そんなことを神はお喜びにならない。でも、私たちは兄弟姉妹を愛するがゆえに、パウロがそのように為したように「兄弟、あなたは間違っている。歩みは正しくない。罪の中を生きている。神の前に悔い改めて正しい歩みをしなさい。」と、そのように勧めることは神がお喜びになることです。そんな信仰者に成長したいものです。

確かに、私たちの国で「あなたは間違っている」と伝えることは非常に難しいです。でも、神がそのことを望んでおられる以上、そのための助けを与えてくださいます。そうしてお互いに成長していこうとするのです。パウロはこの教会を愛するゆえに彼らを諭し続けていました。彼らが悔い改めて正しい道に歩んでいくようにとこのように彼らを買めたわけです。私も子どもたちからいろいろなカードをもらって来ましたが、その中で一番嬉しかったカードにはこんなメッセージがありました。「お父さん、本気で怒ってくれてありがとう！」と。子どもたちは理解したのです。憎いからではなく愛するから怒られているのだと…。私たちには大切な務めがある。まさに、パウロは霊的な父親でした。コリント教会の人たちと霊的な関係でした。でも、愛するゆえに彼らを正そうとするのです。

## 2. パウロの命令 16-17節

16節「ですから、私はあなたがたに勧めます。どうか、私にならう者となってください。」、この「勧める」とはパウロ自身の勧告です。「今すぐ～をしなさい」と勧めるのです。パウロが勧めたことは「どうか、

私にならう者となってください。」です。「ならう者」とは「見習う者、模倣者」ということですから、パウロ自身の生きざまに倣って、彼を模範にしてと言ったのです。また、「なってください。」という動詞は命令形が使われています。ですから、これはパウロ自身のお願いではなく命令なのです。「私の生きざまを模範にして歩みなさい」とそのように命令を与えるのです。

私たちはパウロと同じように言えるでしょうか？「私を模範にして歩いていきなさい」と。今まで私たちが家庭にあって子どもたちに示して来た模範は大変不完全なものです。これまでの自分のことを考えると申し訳ない気持ちが溢れます。しかし、大切なことは、では、あなたは今日からどのように生きるか？です。私たちができることは、まず、私たちが主に従うことによって、少なくとも今から、その模範を示していくことです。たくさん失敗をして来た、言わなくてもいいことを言ったり、しなくてもいいことをしたりと、でも、残された短い人生、後から続く者たちに「お父さんが生きたように生きなさい。お母さんが歩んだように歩みなさい」と言えるような歩みをするのです。皆さんがそのように決心するとき神は助けてくださる。パウロはそのようにして生きていました。彼は「私に倣う者となりなさい。私の生き方をまねるようになりなさい。」と命令を与えたのです。

教会のリーダーたちはそのことをしっかり覚えなければいけません。私たちはどのように生きるのかをただ教えるのではなく、それを行動をもって示すことです。私たちにとって大切なことは教会の人たちが模範となっていくことです。信仰の先輩たちがたくさんいます。信仰歴の長い皆さんもそうでないあなたも同じです。後から続いて来る人たちに、信仰者は家庭において職場において学校において、どこにあってこのように生きるのだということを示していくのです。キリストを良き模範として生きることです。それがパウロが私たちに語ってくれたメッセージで、私たちがしっかりと自分の心に刻まなければならないことです。

そのことを語った上に、17節を見ると「そのために、…」とあります。パウロの生きざまを模倣して生きていくために、その目的のためにパウロがしたことは「私はあなたがたのところへテモテを送りました。」です。テモテとはどういう人物か？二つのことが記されています。「テモテは主にあって私の愛する、忠実な子です。」と。「愛する子」と、パウロの宣教においてテモテは重要な同労者でした。「忠実な子」とは「忠実」という意味の他に「信用できる、当てになる、確か」という意味があります。パウロにとって信頼のおける人物でした。まさに、彼の右腕だったのです。パウロはテモテのことをこのように記しています。Ⅱテモテ3：15「また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。」と。続いて、16-17節「：16 聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。：17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」とあります。

そのテモテを「あなたがたのところへ送った」と言います。その目的は「彼は、私が至る所のすべての教会で教えているとおりに、キリスト・イエスにある私の生き方を、あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう。」でした。少し考えてみてください。パウロはテモテをコリント教会に送りましたが、その理由は何だったのか？パウロがどのように振舞ったのかということコリントの人々に教えるためだったのでしょうか？コリントの人々が「ああそうだ、パウロはそのように生きた。パウロはそのように言っていた。」と思い起こすため？テモテはそこで「パウロはこうしていましたよ。このときにこのように言っていましたよ。」と言って思い起こさせようとしたのでしょうか？

その答えを言うなら「違うのです」。そんな目的でテモテを送ったのではありません。見ていただきたいのは17節にある「思い起こさせてくれるでしょう。」ということばです。この動詞は「再び」と「思い出す」という二つのことばの複合語です。「思い出させる」ということです。では、いったいパウロはテモテを通して何を思い出させようとしたのか？二つのことがここに書かれています。「私が至る所のすべての教会で教えている」とことと、「キリスト・イエスにある私の生き方」です。

・コリント教会の人たちに思い出させようとする二つのこととは？

#### (1) パウロの教え

「私」とはパウロのことです。つまり、パウロの教えを思い出させるということ。パウロが何を教えたのか？言うまでもありません。彼は至る所で「神のことば」を教えたのです。使徒14：15「言

った。「皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。」、パウロはこのような働きをしたのです。神の福音を伝え続けていました。

同時に、彼は人々の信仰が成長することに役立つことを語り続けていました。コロサイ 1 : 28 「私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。」、ですから、パウロは至る所で、訪問するすべての教会にあって、神のことばを語ったのです。それがパウロの為したわざでした。

## (2) パウロの実践

確かに、テモテがコリントの町を訪問したときに、人々はパウロがどのような教えを為していたのかを思い出させましたが、それだけではありません。「キリスト・イエスにある私の生き方を、あなたがたに思い起こさせてくれるでしょう。」と、二つ目に彼が言うことは、テモテが行くことによって「私が教えていることを実践していたこと」を思い起こさせようとするのです。ですから、すべての教会で教えている通りに、「キリスト・イエスにある私の生き方を」示していくのです。

パウロは至る所でキリストの福音を語りました。聖書のみことばを語りました。そして、それだけでなく、語ったみことばを実践したのです。I コリント 9 : 27 に「私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。」、パウロは自分の肉をコントロールすることを実践していたと記しています。また、ヤコブはこう言っています。ヤコブ書 1 : 22 - 23 「:22 また、みことばを実行する人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者であってははいけません。:23 みことばを聞いても行わない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で見る人のようです。」、パウロも人々に語っておきながら、自分がそれをしないなら自分は「失格者」になると言っています。そんなことがないように「自分のからだを打ちたたいて従わせます。」と言います。

このようにパウロもヤコブも私たちに教えています。パウロがテモテを送ったのは「パウロの歩みを思い出させるため」だと言いました。どのようにして彼らはパウロの歩みを思い出すことになったのでしょうか？先ほども言ったように、テモテが「パウロはこのときにこのように言っていましたよ。こんなメッセージをしていましたよ。」と言うことによって思い出したのでしょうか？違いますね。テモテの生き方をもって人々はパウロの生き方を見たのです。なぜなら、もうすでにテモテ自身はパウロの歩みを模範として歩んでいたからです。

パウロのメッセージは「私にならう者となってください」（4 : 16）でした。そして、私はあなたがたのところにテモテを送ると言いました。そして、テモテが行くことによってあなたがたに思い起こさせてくれるでしょうと言います。今はパウロはコリント教会の人たちのところにはいません。でも、テモテが行くことによって、あたかも、そこにパウロがいるようだったのです。なぜなら、テモテ自身はパウロの模範に倣って生きていたからです。テモテを見たならパウロを知ることになると、これはまさに究極の弟子作りです。

神は私たちに弟子作りを命じています。私たちは伝道して彼らを訓練していきます。でも、私たちがここに見る弟子作りは「パウロの歩みにならってテモテは生きた」のです。だから、テモテを見るときにそこにパウロを見るときです。パウロとテモテはこんな関係にあったのです。そんな弟子作りを私たちはやっているのでしょうか？彼らはそのような歩みをしていたのです。そして、みことばが私たちに言うことは、私たちは弟子を作っていきますが、あなたの生き方を見てそれに倣って歩んでいく信仰者を私たちは作り上げていくということです。それが「弟子を作る」ということです。

神の恵みによって、いったい私たちは何人くらいの弟子を作ってきたのか？でも、この二人はこのような関係であったと、そして、テモテがコリント教会へと送られていくのです。テモテを見なさい、私がどのように歩んだかをあなたがたは思い出さずでしょう。その模範に倣って生きていきなさい。」と、これがパウロのメッセージです。

## 3. パウロの警告 18-21節

最後に、18-21節にパウロの警告が記されています。18節「私あなたがたのところへ行くことは

あるまいと、思い上がっている人たちがいます。」、パウロは再びコリント教会を責めています。戒めています。なぜなら、教会の中に「思い上がっている人たちがいたからです。この「思い上がって」とは「高ぶる、～を誇っている」ということです。罪の中を歩んでいたコリント教会の人たちは、パウロは自分たちのところには絶対に来ないと思い込んでいるのです。そこで彼らは自分たちのやりたいことを継続して行っていこうと、そのように考えていたのです。

そこで19節「しかし、主のみこころであれば、すぐにもあなたがたのところへ行きます。」とパウロはその意志があることを告げました。その上でこんな警告を与えます。「そして、思い上がっている人たちの、「ことばではなく、力を見せてもらいましょう。」と。訪問してパウロは彼らの何を見たいのか？「ことばではなく、力を…」と言っています。コリント教会の問題は、彼らはことばでは立派なことを言っていたけれど、自分たちが語るようには生きていなかったことです。ですから、パウロは20節でも「神の国はことばではなく、力にあるのです。」と言っています。この「神の国」とは「神の国に入れられた人たち、救いに与った人たち」のことです。彼らは神の国の国民とされて、もうすでに、国民としての生活が始まっているのです。ですから、パウロが言いたかったことは、「神の国」、この救いに与るということはその人のうちに神のみわざが始まることだということなのです。

その人は立派なことを言っているかもしれない、その人が言っていることは確かに真理かもしれない、でも、問題はその人のうちに神の力が働いているかどうかだと言うのです。

\*「真理をどれだけ知っているか」ではなく「神の力によって変えられているかどうか」である  
皆さんもよくご存じの「種まき」のたとえがあります。道端に蒔かれた種、岩地に蒔かれた種、いばらの中に蒔かれた種、そして、良い地に蒔かれる種があります。道端も岩地もいばらの中もすべて共通しているのは、彼らは救いに与っていませんでした。ある人は関心をもちました。ある人は喜んでみことばを受け入れました。みことばを聞いて感動を覚えたのでしょう。四番目の「良い地に落ちた種」、これはこのような人だと教えます。ルカ8：15「しかし、良い地に落ちるとは、こういう人たちのことです。正しい、良い心でみことばを聞くと、それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせるのです。」、この「しっかりと守り」ということば、これは1コリント15：2に見ることが出来ます。そこには「また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。」とあります。この「しっかりと保っていれば、」ということがそれです。これは何か自分で一生懸命頑張って救いにしがみつきなさいということではありません。心からこの救いを受け入れるなら…ということなのです。福音の真理を心から受け入れることです。

そこで、言われていることは「その信仰は本物なのかどうか？」ということなのです。どうすればそれが分かるのか？それは、その人のうちに神が働いているかどうかによって明らかになるのです。つまり、救いとは、私たちが神の真理を知識として蓄えることではないのです。どんなに知識を蓄えてもその知識がその人を救いません。イエス・キリストを信じる信仰によって救われるのです。でも、神がその人を救ってくださったなら、間違いなく、その人のうちには神の力が働いているのです。

ですから、救われているかどうかはその人のうちに神が働いているかどうかなのです。神の力によってその人が変えられ続けているかどうかです。ヤコブはこう言います。ヤコブ書2：18「さらに、こう言う人もあるでしょう。「あなたは信仰を持っているが、私は行いを持っています。行いのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行いによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。」と。行いは救われた者について来るのです。ですから、ヤコブが言うように「あなたは信じていると言うけれど、行いはどこにあるのですか？」、つまり、「あなたの中には神の力が働いていないのではないのですか？」と言うのです。救いに与ったならその人のうちには神の力が働くのです。そのことが顕著に行いとなって現れるのです。

だから、このように言えます。「救いに与った人は真理をどれだけ知っているかではなく、神の力によって変えられているかどうかだ。」と。あなたのうちに神が働きを為し続けてくださっているかどうかです。神への渴きをあなたのうちにいる神がもたらしてくれているかどうかです。あなたをキリストに似た者へ変えようとして働いておられるかどうかです。ことばを聞きたいと願い、みことばに従っていきたくらいと願うのは神があなたのうちに働いておられるからです。

ですから、私たちが福音を語るときに大切なことは、ただ福音のメッセージを語るだけでなく、

福音によって為された神のみわざを示すことです。そうでなければ、人はどうして主の偉大さを知ることができるでしょう？ 20節「**神の国はことばではなく、力にあるのです。**」、パウロが言いたかったことは、あなたがたは立派なことを言っているのに、なぜ、罪の中を歩み続けるのですか？神があなたのうちにおられるなら、どうして神が喜ばれることをしないのか？です。

最後、21節にこのような警告のことばがあります。「**あなたがたはどちらを望むのですか。私はあなたがたのところへむちを持って行きましょうか。それとも、愛と優しい心で行きましょうか。**」と。選択を与えています。彼らのもっている「高慢の罪」に対して、パウロはそれを大目に見て見逃すのではなく、その罪を厳しく責めています。それは彼らが罪を悔い改めて神に立ち返っていくためです。しかし、それは彼らが自分の期待を裏切ったなどという人間的な怒りや憎しみからの行動ではありません。彼らを愛するから、彼らが決して神の祝福を逃してしまうことのないように、そのことを願ってパウロは彼らに悔い改めを勧めるのです。もし、そうでなければ、私があなたがたのところを訪問するときはむちをもっていかなければならない、あなたがたを矯正するためにと言います。「**それとも、愛と優しい心で行きましょうか。**」と、それは彼らが罪を悔い改めたからです。責めるところがないからです。

このように、パウロはいかにコリント教会の人々の悔い改めを願っていたのかを見ることが出来ます。高慢の罪から離れなさいと、パウロたちがそうであったように謙虚に仕えていくのです。私たちはだれが偉いのかとそんな自慢をし合うのではなく、互いに愛し合って互いに仕え合っていくのです。

これがパウロのメッセージでした。もちろん、パウロがむちをもって私たちの教会を訪れることはありません。しかし、主は戻って来られます。そのとき、すべてをご存じの主によって私たちはさばかれます。そのことを私たちは知っています。そのことを頭で知っていると言いながら、主の再臨はまだ来ないとあなたは信じていませんか？「いえ、まだまだ、まだしばらく時間がある」と。あなたが自分自身に問い掛けてみることは、今、私が主の前に立つなら、主は私の信仰を喜んでくださるかどう…です。「救い」というこの上もない祝福をご自分のいのちという大きな犠牲によって与えてくださった主に対して、それにふさわしい悔いのない日を過ごしているかどうか？

もし、私がそうでないなら、主の前に悔い改めることです。皆さん、確実に訪れるその日に対する備えをするのは「今」です。今日、私たちはひとり一人、自らの信仰を吟味しながら新たな決心をもって、この新しい日をしっかりと歩んでいきましょう。主に従うこと、それが救われた私たちが、救ってくださった主に対してできる、そして、主が望んでおられる生き方です。その歩みをもって私たちの感謝を現していきましょう。